教職大学院における学びの活用に関する一考察

―校長、副校長、指導主事、教員養成の職務を通した共同省察から―

小林　祐一（沖縄女子短期大学）
村田　悦子（東京都江東区立臨海小学校）
鈴木　稔　（東京都目黒区立東根小学校）

１．はじめに

教師教育の高度化が求められる現在において、教職大学院への期待は大きい。今後、多様な変化に対応すべく「学び続ける教員像」を具現化していくためには、教職大学院の検証を量・質の両面で実施していく必要がある。

本稿は、同じ教職大学院を修了した３名の現職教員（修了後６年経過）を追跡調査することで、教職大学院における学びの意義について考察することを目的にした実践的な研究である。修了後３名は、副校長、校長、都・区教育委員会指導主事、教員養成（短期大学）の職務を経験している。それぞれの事例から、教職大学院の在り方や学びの活用方法についての知見を見出し、今後の教職大学院像の一端を提示したい。

２．研究の方法

「教職大学院の学びをどのように生かしているか」を主としたテーマとし、自己省察と共同省察を繰り返すことで、自分だけでは気づけない新たな知見が得られるようにした。具体的な方法は、以下の通りである。

(1) 文章化による自己省察

①教職大学院で印象に残っている出来事（授業以外も含む）は何か

②現在の職務に生かしていると考えられる、教職大学院での学びは何か

まず、一人一人が２つの設問に関して振り返り、文章化することで、自分の考えを明確にした。

(2) ３人による共同省察

次に、３人が自己省察についてコメントをし合った上で、自由な形式のディスカッションによって共同省察した。時期・頻度は、大学院修了後５年目、６年目、それぞれ２回ずつ、１回あたり１～２時間程度のディスカッションを実施した。発話の記録を文字化し、メールなどのやり取りにより確認した。

各自の自己省察やディスカッションの内容を記録・カテゴリー化し、共通に語られた事項を見出すことで、教職大学院のカリキュラムや授業内容との関連について考察した。

(3) 分析のために活用した資料

教職大学院在学中の資料、学びの履歴がわかるポートフォリオ、修了後、職務上作成した資料、論文、発表原稿などを参照した。また、東京都管理職候補者研修に関係する資料を活用し、職務との関連を明らかにするよう努めた。

３．Ａ教職大学院の概要（在学当時）

調査対象者が在学した時期は、Ａ教職大学院の２期にあたる。発足１年目の課題をふまえ、さらなる充実へ向けて試行錯誤が続いた時期であった。

（1）教育目標

社会の変化やニーズを踏まえ、学校教育が抱える様々な現代的な教育課題に協働して解決していくことのできる高度な職業的専門性や豊かな人間性を携えた教員を養成する。

①養成する教員…地域や学校における指導的な役割を果たし得る教員
②育成する力　…柔軟な実践力・実践と理論の融合力・先導的な指導力・創造的な改革力

（2）科目・カリキュラム編成の特色（実践と理論の往還、学びを支える協働）

①共通科目　　・・・５つの領域、必修
②選択科目　　・・・履修モデルに応じて選択（３人は教育管理職モデル）
③課題研究科目　・・・実習等を通して課題解決（成果物を作成）
④実習科目　　・・・所属校（週１日程度）

４．調査対象者

３名ともに多様な経歴をもつが、管理職候補者選考を経て教職大学院の１年履修プログラムに派遣された点は一致している。したがって、積極的に希望して大学院に入学したわけではなく、入学当初は教育管理職に就くための研修として教職大学院の１年間を捉えていた。経歴及び修了後の職務については、以下の通りである。

①鈴木稔
・大学卒業→東京都公立小学校教諭
・管理職候補者選考→教職大学院派遣（１年履修プログラム）
・東京都区立小学校　副校長
・東京都区立小学校　校長（２０１６年１月現在）

②村田悦子
・大学卒業→民間企業勤務→東京都公立小学校教諭
・管理職候補者選考→教職大学院派遣（１年履修プログラム）
・東京都教育委員会　指導主事
・東京都区立小学校　副校長（２０１６年１月現在）

③小林祐一
・大学卒業→大学院修士課程→東京都公立小学校教諭
・管理職候補者選考→教職大学院派遣（１年履修プログラム）
・東京都区教育委員会　指導主事
・私立短期大学児童教育学科　専任講師（２０１６年１月現在）

５．共通に語られたこと

３人の自己省察とディスカッションによる共同省察の相互作用から４つのキーワードが浮かび上がった。４つのキーワードと在学時の学びを結び付けるとともに、それぞれの事例から具体的な学びの活用法を見出す。

（1）協働、ネットワーク

最も多く語られたキーワードが「協働」であった。また、人とのつながりに関する内容が多く語られた。Ａ教職大学院のカリキュラムや授業に深く浸透していたキーワードが、その後の職務にも影響を及ぼしていることがわかった。

＜学びを生かしている事例＞
・学びの場としての校内研究会、校内研修会など、教師全員の協働の場と学年会などの学年の協働の場を意図的に設定している。（村田）
・優秀な人材が世の中にはたくさんいることがわかった。教育に関するオーソリティ（教授・専門家等）や同じ教員仲間、学生とのコネクションを生かしている。（鈴木）
・当時のネットワークを生かし、検討会議委員や研修会の講師を依頼している。教育施策の推進の際に、多様な人々との協働を意識して取り組んでいる。（小林）

◎協働プロジェクト

これらのコメントは、在学当時、授業以外にも学生同士が協働で学ぶ雰囲気が醸成されていたことが要因と考えられる。在学中には有志の学生が中心となり、自主的な「協働プロジェクト」が次々に生まれた。

＜自主的な協働プロジェクト＞

協働プロジェクト	内容
①現職とストマスによる教科研ゼミ	ストマスの指導案作成、模擬授業支援
②相互の学校訪問、出前授業	異校種視察、授業実践、協議会
③宿泊研修	学校訪問、授業研究、フィールドワーク
④文献を見合える環境の構築	控室本棚の文献をポップで紹介し合う
⑤教職大学院の歌づくり	A大学周年記念事業にエントリー
⑥実技研修	正月の書初め、フットサル大会参加等
⑦海外研修（フィンランド）	ヘルシンキ大学との研究交流会

当時の教職大学院は、教科専門に関する授業がなく、ストレートマスターが指導案作成に四苦八苦していた。そこで、現職教員が教科ごとにチームを組み、指導案検討や模擬授業に関する自主的な学びの機会をつくった。「協働」をスローガンでは終わらせない意識が現職教員に強くあった。

授業はグループで課題解決する形式が多かったのだが、小・中・高、教科専門、地域などが異なる教員が集まっていたため、相互理解に時間を要する場合があった。しかし、それらの異質性を障壁と捉えず、学びの機会ととらえ、相互に学校訪問し、実践を見せ合う交流が生まれた。さらに、自分の研究テーマに関わる授業を他校で実践し、フィードバックを受けながら研究を進めることもたびたび見られた。

さまざまな協働プロジェクトが生まれ、修了間際には、学びの集大成（決して思い出づくりではない）として海外研修（フィンランド）に行くまでに発展した。今でも、自主的な学びの会が継続されているが、この一年間のインパクトが強かったためだと考えられる。この時の「協働」の強烈な印象が、その後の職務を遂行する際の意識に生かされていることがわかった。

（2）理論と実践の往還

一年間ではあったが、学術的な研究を経験することで、実践を理論的に考察するようになった。３人はそれぞれの言葉で表現したが、修了後も、先行研究や先行実践を踏まえ、積み上げられた理論をヒントに課題解決を試みるようになった。

＜学びから意識するようになったこと＞
・最大の学びは、学校を外から見る視点をもつことができたこと。なんでも与えられたことを忠実にこなすことから、一度疑問に思い、本当に大切なことかどうかを疑う習慣ができた。（村田）
・一つの物事について、じっくり考え、それを他の学生と議論することで、より深く掘り下げる機会を多くもてた。様々なディスカッションの方法や学術研究の進め方を学んだので、職務に生かしている。（鈴木）
・学校教育を、離れた視点から客観的に見直すことができたこと。広く学校教育の在り方について考えたこと。学術研究の方法に触れた。（鈴木）
・質的な研究方法の手法と意義、現場の理論との整合性などを実際の所属校で実感できた。理論と実践の往還を意識し、実践的な研究を進めるようになった。（小林）

教職大学院で現職教員学生が最も苦しむのが、学術的な研究とこれまでの実践研究のギャップである。それは、様々な授業や課題研究の場面で現れた。しかし、これは学生だけの問題ではなく、教員陣にも同様と考えられる。

当時のＡ教職大学院は、毎週授業に関するＦＤが実施され、研究者と実務家教員が協働で授業をつくっていた。それが学生にも影響を及びしたと考えられる。現在、アクティブ・ラーニングの重要性が叫ばれているが、教職大学院の授業はすべてが学習者主体、参加型の学びであった。安易な参加型の形式に取らわれず、学習者の思考を主体的に促す工夫が随所に見られた。それはまさに、授業という学びの場を通して、理論を実践におろしている作業と考えられる。学生が終了後もこの学びを意識している理由は、理論と実践の往還を授業で具現化していたためだと考えられる。

＜成果の還元＞

現職教員は、修了後、学習成果の還元が義務付けられていた。３人は修了後６年間で、三者三様の取組みをしていた。

①学会発表等…日本教師教育学会、日本教育経営学会、日本教育方法学会等
②論文・著書…『教頭の仕事術』、教育系雑誌論文、大学研究紀要等
③研修会講師…シンポジウム登壇者、管理職研修講師、校内研修講師等

現在、教育系学会では、実践的な研究の重要性が高まっている。教職大学院の修了生が各方面で専門性を発揮し学びの還元に努めることは、教育現場と研究者をつなぎ、理論と実践の往還を具現化する点においても意義が大きいと考えられる。

（3）具体的な活用事例

授業には、副校長や指導主事の職務内容に直結する内容が多く含まれていたため、学んだことを職務に適用する事例が多く見られた。３人とも、あらかじめ修了後の職務を具体的に想定して授業を受けていたことがわかった。

＜学びが役に立った場面＞
・学校経営上のリスクマネジメント・クライシスマネジメントについて、教職大学院の授業で多くの知識を得たり、仲間と考えたりしたことで、実際の場面での対応の引き出しが増えた。（学級崩壊への対応、保護者対応、教員の指導など）（村田）

・勤務している学校で、小中連携の研究発表をすることになり、教職大学院の授業「学校間連携」で学んだこと、考えたことや資料がとても役立った。（鈴木）
・具体的な市を想定し施策を立案した経験が、教育行政の場で生きた。（小林）

＜学びの活用事例：指導主事（小林）＞

教育行政の職務は、これまでの学校勤務では得られない知識が必要である。授業において広い視点から具体的な施策立案などを学ぶことで、教育行政の仕組みを学ぶことができた。A大学院での経験がそのまま、新しい教育課題への対応として市区教育委員会において活用できた。

例）・新しい教育課題への対応（小中一貫教育、保幼小連携、各種研究委員会）
・教育施策の立案（教育ビジョン、防災教育、学校図書館活用）
・研修会、講演会の企画・運営（参加型研修、ＯＪＴ、区民講座）

＜学びの活用事例：学校管理職（村田）＞

学校経営・学校運営の立場から物事を考えると、どれもが学校を取り巻く課題となっている。フィールドワークや所属校のアクションリサーチ、実地研修などにより、具体的な手立てを学ぶことができた。また、現場に応用して活用することができた。

例）・教育行政と学校との連携・学校間連携・地域との連携・教職員の服務
・教員の資質向上（自分の研究テーマ）・保護者対応
・不登校、特別支援に関すること

＜学びの活用事例：ポートフォリオ（鈴木）＞

何か困ったこと、考えたいことがあると、字引のように教職大学院でのファイルを読み返している。当時の学びのポートフォリオは、自分の机の周りに置いてある。（右写真）

＜学びの活用事例：校長先生のお話（鈴木）＞

校長職に就き、最も重要視しているのが朝会時の「校長先生のお話し」である。これは毎週、さまざまな工夫を凝らして実施している。あらためて省察すると、教職大学院での学びが存分に生かされていると考えられる。

平成２７年６月８日

みなさん、おはようございます。

以前、みなさんにこのことをお話ししました。「時を守り　場を清め　礼を正す」

時間を守りましょうという話や、あいさつや返事をきちんとしましょうという話です。今日は残りの一つ、この「場を清め」について話します。

まず、ひとつ詩を紹介します。聞いてください。

はきものをそろえる

はきものを　そろえると　心もそろう
心がそろうと　はきものもそろう

ぬぐときに　そろえておくと
はくときに　心がみだれない

だれかが　みだしておいたら
だまって　そろえておいてあげよう

そうすればきっと
世界中の　人の心も　そろうでしょう

長野県円福寺　住職　藤本幸邦

これは、長野県円福寺の住職だった藤本幸邦（ふじもとこうほう）という人が作ったものです。

はきものというのはみんなの履く靴のことです。みなさんは、おうちに帰ったり、友達のうちにあがったりしたときに、自分の靴をぬぎちらかしていませんか。はきものをそろえることは、日本の美しい作法の一つです。親が子に教えるしつけの一つです。

学校では、外ばきや上ばきにはき替えるとき、靴箱に自分の靴を入れますね。靴のそろえ方は分かりますか。教えますね。靴箱の手前の端っこに両方の靴のかかとをぴたっと合わせるんです。ぜひみんなやってみてください。

この詩には、「はきものをそろえると心もそろう」とあります。はきものをそろえるの「そろえる」はきちんと並べることですね。心もそろうの「そろう」は同じ言葉ですが、一つになる、調和するという意味ですね。「世界中の人の心が一つになる」はちょっと大げさすぎるので、これをクラスにしてみましょうか。

「だれかがみだしておいたら　だまってそろえておいてあげよう　そうしたらクラス中の人の心もそろうでしょう」　どうですか。いいと思いませんか。クラス中の人の心がそろったら、楽しいクラスになるでしょうね。

クラス中がそろったら、学年中がそろうようになるでしょうか。もしかしたら、学年中がそろったら、さらに学校中の人の心がそろうかもしれませんね。

そうなったらいいなあと先生は思います。

先生のお話はこれで終わります。

※校長先生のお話で留意していること

①学校経営方針や時事的ニュースを考慮して話題を設定する。

②話題について、事実を調べる。原典にあたるように留意する。

③前週の木曜日に全教職員に内容を配布し、学校全体で事前の意識化を図る。

④月曜日に講話、４、５分にとどめる。低学年にもわかるように具体物などを用いて興味・関心を喚起する。また、高学年にも聞きごたえがあるような内容にする。

⑤校長室だよりの裏面に文字化したものを家庭に配布し、共通理解を図る。

大学院の授業では、役割演技が多く取り入れられていた。朝一番の授業では、日直担当が割り振られ、１分間のスピーチから授業が始まることがあった。その時間の意義を見定め、対象とねらいを考え、正しい知識にあたりながら表現

方法を模索する。「校長先生のお話」も同様である。これらは大学院時代の学びが基礎となっていると感じる。

（4）課題研究

各自が１年間追究したテーマが、その後の職務においても引き続き深められていたことがわかった。課題研究で経験した「テーマの設定」「研究の手法」「成果物の作成」が、その後の職務において課題を解決する場面で役立っていることがわかった。

＜最も意義が大きいと考えられる学び＞

・「学校改善につながるミドルリーダーの人材育成」…人材育成について実践研究（もどき）ができた。研究的に学校現場をみることを心がけている。また、自分自身がカウンセリング、コーチングなどの手法を用いて、対話を重視した学校経営を実践している。（村田）

・何と言っても、課題研究で自分が取り組んだ、「校内研究で教師の授業力改善を進めること」が、副校長の立場で実践できた。①授業観察とそのフィードバック②研究協議会の活性化③校内研究の進め方―現在の学校で実践している。（鈴木）

・何を考えるにも、ＥＳＤ（課題研究のテーマ）の視点で考えるようになった。研究会に所属して、継続して研究している。（小林）

＜学びの活用事例：課題研究「学校改善につながるミドルリーダーの人材育成」（村田）＞

この研究を通して、時間をつくってでも取組まなければならない内容と、時間をかけずに済ます内容に分けて、考えるようになった。具体的には、以下の取組みを実行した。

※課題研究の成果を踏まえて実行したこと

①よりよい学年集団を意図的につくることで、学びを促し、課題解決を促すようにした（学年会毎週実施、学年に一人主任教諭を入れる）

②主幹・主任教諭がメンバーである運営委員会、校内支援委員会、全員がメンバーの校内研究会をミドルリーダーの学びの場と位置づけた。

③実際にその教師が単なる職務としての会ではなく「学びの場」と実感するには、今までの実践や、自分自身を意図的に振り返る機会をつくった。

（カウンセリング、コーチングなどの手法を自分で実践し、対話を重視した経営へ）

※成果・変容

①「学年会」の充実：毎週必ずとる　教材研究、情報共有、隠れた人材育成

②「校内研究会」の充実：協議会の活性化　全員が発言する工夫

③　若手教師の学びの会「竹の子会」

④「学力・授業力向上委員会」の発足：授業を見合う仕組み、ワンポイントアドバイス

課題研究から明らかになったことを現在の職場に応用した結果、先生方が主体的に学びの場をつくっていこうとしたことが大きな成果である。

６．研究の成果と課題

当事者が語り合うことで、教職大学院における学びの意義を明らかにすることができた。Ａ大学院では、その理念が学生の主体的な活動として具現化されていたことが、その後の修了生の職務への取り組み方に影響を及ぼしたことがわかった。３名は６年経った職務においても当時の学びを活用していたが、それが当時の授業の在り方と関係していることを読み取ることができた。実務家教員と研究者教員の協働による授業実践が、実践的な

研究を追究する姿勢として３人に影響を及ぼしていたことは、教職大学院の在り方を考える上で、大きな示唆を与えるものと考える。

課題は、修了後の職場が、必ずしも修了生の学びを活用する職場とは限らない点である。教職大学院修了者の役割を広く認知させ、計画的な人事配置・人材活用を実現することが望まれる。

また、研究方法としては、大学教員からも聞き取り調査をする必要があった。インフォーマルな意見交換はあったものの、本稿の妥当性について議論することはなかった。本稿は３名の追跡調査にすぎなかったが、今後は、より客観性の高い手法を取り入れて、これからの教職大学院像に迫りたいと考える。

７．主要参考文献

・中央教育審議会（答申）『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について』２０１２年８月
・東京都教職員研修センター『公立小・中学校　副校長　新実務必携』２０１２年３月
・東京都教職員研修センター『教育管理職候補者研修　資料　指導主事の基礎』２０１３年３月
・藤井穂高編『教頭の仕事術』２０１３年３月、教育開発研究所